日伸鉄工建設（東京・葛飾区）

難案件に特化 東京23区内のMグレードファブ

地域交流深め愛される事業所に

東京駅近辺や虎ノ門、西新宿などで佳境を迎える東京の再開発。現場に搬入される鉄骨をめぐっては電気や配管のスリーブの位置間違いや、海外から入る途中で図面が変更されたことによる修正が求められることも多い。昔は現場で直していたが、現在は指定工場で直す必要があり通常1～2週間かかる。東京23区で2ヵ所というMグレード工場のうちの一つ、日伸鉄工建設（東京・葛飾区、金本貴範社長）は柱の組み立てから塗装、現場も行うオールマイティさを武器に、鉄骨の修正も2～3日で対応する技術力で重宝されている。

◇　◇

同社は1965年創業で、建築6割鉄骨4割という業態からリーマンショックを機に鉄骨を9割と、鉄骨を主軸に据え、建設も引き続き手掛ける。金本社長は「図面も自社で書き、自社工場で加工して現場も施工するため穴あけ、切断、開先加工、溶接、塗装、出荷と工程全体に関わる仕事をこなしている。大きいグレード工場では単品をひたすら作るような感じで、梁なら梁だけ、柱は大組だけ、溶接士は溶接へ特化、塗装工程は塗装作業のみとなるが、Mグレード以下はいろいろやっているところも多く、当社も柱の組み立てから塗装、現場まで工程に広く関わる業態で、社員にとっては面白さも感じられるはず」と語る。

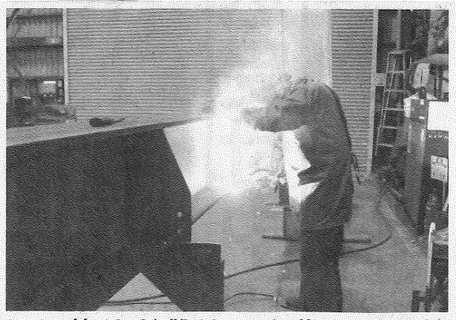
第1工場は柱、第2工場は梁、第3工場は切断や穴あけなどの一次加工を行っており、年間1200㌧、月産100㌧ベースの生産量だ。「指標で年間何トン月産何トンはあるが、当社は難しい仕事の請負を持ち味にしているので加工賃で稼ごうという考え方だ。トン数は地方との価格競争で太刀打ちできないので、2019年など1500㌧という年もあったが、その後のコロナ禍では年間700㌧へと落ち込んだ。しかし無理はせずに引き続き手間がかかる難しい案件に特化している」とのことだ。

首都圏再開発現場では鉄骨に起因する問題も多く発生し、例えば鉄道関連工事であれば計画的に電車を止めるので敏速な対応が求められる。同社は配管のスリーブの位置などを素早く取り換えて対応できるので、工期の遅れを取り戻す最後の砦として頼りにされている。施工実績は、例えば津波発生時などの高潮を止めるための防水シャッター設置のため強度を保った上屋を新富町、江戸川橋、水天宮などの駅へ設置、武蔵小杉のロータリーの耐震工事、駅舎の改修では旗の台駅の屋根の架け替えでRCの鉄筋コンクリートの柱に鉄板を巻き落橋を防止する鋼板巻、その他銀座の店舗の外壁工事や体育館の建設、御茶ノ水駅構内では東日本大震災後で生じた盛り土の法面の変位の補強における架台の設置など、枚挙にいとまがない。

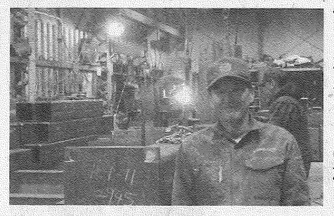
「複雑形状は自動化が難しく当社が得意とする分野。溶接に使うガスは炭酸ガス100％で、すべてに有しているのでその特色を生かし、例えば大雪が降れば総動員で雪掻きを行い、ウエルダーがあるので災害時にスマホの充電ができるように区と災害協定を結び、『子ども110番の家』としても登録している。道路に面したところにはコンプレッサを置いて自転車の空気が無料で入れられるようになっており、ペットボトルのキャップを集めてワクチンを寄付する活動や、AEDも幼児用などから設置している。町工場は高齢化が言われるが、当社社員の平均年齢は40～50代と比較的若く、子育て中もしくは子育てが終わりつつある世代が多い。そのため当社は子供にフォーカスすることとし、子供を入口に地域と交流を深めている。子どもひろばという企画では区の施設で子ども食堂を開催し、同時に鉄骨の模型を組み立てて一緒に遊ぶ企画で交流している。鉄骨模型は図面を見ながら組み立てる本格的なものでヘルメットを被ってジャングルジムのような感覚で組み立てる。また葛飾ライブファクトリーでは溶接体験を行っており、小学校の社会科見学では代表2人が溶接体験、それ以外のクラスメートは鉄骨の組み立てを体験する。このような活動の積み重ねにより地域に認知されるようになり、騒音苦情などもなくなった」と成果を語る。

同社はインスタグラムの発信にも力を入れており、「イベントや社内行事もインスタグラムで見られるようになっているが、それを見た若い人材が入社してくれるようになった。広告宣伝費をかけず求人広告も出さずに若い人材が確保できていることは本当にありがたい。社員の7割は自転車通勤圏在住と当社は近所密着型で、近所の役に立ち、近所から愛され、若い人材も近所在住でインスタグラムを見て応募してきているので近所で人材確保という好循環が生まれている」と語る。

周辺は狭い路地も多く基本的には宵積みの朝搬入という工程だが、金本社長は「地の利を生かして2往復できることもあり、23区のMグレードという特色が生きている。現場が近いので建物の進捗状態がよく分かるのもメリットで、業務の視覚化はやりがいにつながる。社内で図面を書いているので現場に行かれない社員向けには現場のアルバムを作って共有するなど、社内の情報共有や交換は闊達で風通しが良い。とはいえ仕事が薄い時は薄くても、忙しい時は難しい案件がひっきりなしという状態にもなるので頭はパンク状態となり、年間では山あり谷ありだ。社内旅行なども実施してアットホームな雰囲気づくりを心掛けているが、社内リクリエーションを気に入って長く働いてもらえればと思っている。またハード面ではショットブラストなど効率化を目指した機械も導入しているが、基本はマンパワー。溶接ロボットは一定の工法にしか使えないが、当社の仕事はロボットが使えない一品一様が多く、技術力を伸ばしていこうというのがコンセプト。郊外に移転し完全自動化で大きい鉄骨を作るという流れも理解するが、当社は逆の発想で高い技術力を要する案件を中心に、在東京23区の鉄骨ファブとして高い技術と小回りが効くところを持ち味に、今後はHグレード認定も目指している」という。同社の動向は頻繁にアップデートされるインスタグラムで確認したい。


炭酸ガス溶接による鉄骨製造

金本貴範社長㊨と金本正江課長補佐


藤牧幸雄工場長と稼働中の工場